いずみ

札幌彫刻美術館友の会会報

第１０号

平成17年１月１日

題字：國松明日香氏

本郷新彫刻シリーズ10

「　牧歌　」　～札幌駅前広場～

本郷　新さんとライスカレー

工藤欣弥（元北海道立美術館長・元芸術の森美術館長）

本郷新さんとの初対面は昭和４２年だから、もう３７年も昔ということになる。

その年私は道の教育委員会に勤めていて、ある日美術館長を命じられた。札幌出身の洋画家三岸好太郎の遺作220点が遺族から寄付されることになり、その作品を収蔵・展示する美術館を開館することになったためである。美術館は旧図書館の建物を改装、私は初代館長になるとともに、北海道に於ける最初の美術館長になった。

５人の群像モニュマン。北海道の象徴ポプラの若木、トウモロコシ、そしてスズランを持った乙女たちを、角笛を吹く男と子羊を抱く男が守るようにやさしく見まもる。泉の像に次ぐ群像彫刻。（１９６０年）

開館は９月にきまり、開館準備に忙殺されていたある日、本郷新さんが開館式の案内が来ないといって怒っている、という話が伝わって来た。そんなはずがないと調べさせたら、事務室ではちゃんと出しましたという。よく調べたら住所は東京のお宅あてになっていた。

本郷さんはその頃、夏の間はずっと札幌にいて、小樽の春香山に建てたアトリエで過ごされていた。昼はアトリエで仕事をし、夜はススキノで友人,知人と飲んでいるという生活であ

った。開館式のご案内は東京のご自宅に届いていたが、ご覧になっていなかった、ということらしかった。大急ぎで春香山のアトリエあてに案内状を出し、ご出席の返事をいただいた。怒っているというからどんなに怖い先生かと思ったら、お会いしてみると笑顔のとてもやさしい方だった。

開館式が終わってほっと一息ついていた頃だったと思う。本郷さんと雑談していて、私が子供の頃ライスカレーが大好きだったという話をしたら、僕ライスカレーを作るのがうまいんだよ、春香山のアトリエの冷蔵庫にカレーのルーを蔵（しま）ってあるからご馳走しよう、とおっしゃった。旬日を経ず春香山のアトリエに案内された。

アトリエといっても別荘という趣の建物で、キッチンもあればバスもあった。西は一面の日本海、広いアトリエには陽光が燦々とあふれていた。地続きの隣にはホテルがあって、そこから運んでくる洋食と飲み物でもてなしてくれた。ご自慢のカレーは確かにうまかった。ルーは寝かせるほどうまくなるんだよとおっしゃっていた。

本郷さんは話好きだった。館長室で書類に目を通していると、ふらりと本郷さんがお見えになる。新米館長にはそのお話がとても興味深く勉強になった。美術の話ばかりではない。釣りの話が多かった。釣りの話の中に本田明二さんの名前がしばしば出た。どんな話であったかみんな忘れたが、滑稽な話が多く、本田明二さんにはほとんどおつきあいがなかったが、とても親近感を感じた。

ある日のこと、いつもとは少し違った緊張した面持ちで本郷さんが、僕の作品をそっくり寄付するから、道に三岸好太郎のように美術館を建ててもらう方法はないものだろうかと相談を持ちかけられた。本郷新といえば日本の具象彫刻界の頂点に立つお一人である。

三岸好太郎の例から考えて、そう無理な話とは思えない。しかし三岸好太郎の場合はそういう例は北海道として初めてのことである。一気に勢いに乗って実現した、という思いがする。絵画と彫刻は違うといっても、役所の側から見れば同じ「美術」ということになるだろう。おそらく実現は無理と直感した。あいまいなことを言って期待感を持たせ、行動を起こさせて結果はダメだったということにならないよう、正直に私の考えを申しあげた。

そのときいっしょに、信州小諸市にある「小山敬三美術館」のこともお話した。小山敬三氏が美術館を建て、自作３０数点とともに小諸市に寄付した、という例である。札幌彫刻美術館が開館する２，３年前のことだったと記憶している。

（※北海道立美術館は昭和４２年に開館した北海道最初の美術館である。昭和５２年の道立近代美術館の開館と同時に館名を三岸好太郎美術館と変更した。）

新春のお慶びを申し上げます。

おかげさまで「いずみ」も第１０号を迎えました。

今年一年が皆さんにとって健やかで充実した年になりますように。

橋本信夫　（会長）

新生友の会が発足して３度目の正月を迎えました。この間に会員数はこれまで最高の１３０名にも達し、彫刻美術館のＰＲ，会報の発行、彫刻の鑑賞・解説・調査・研究、講演会・シンポジュームへの参加、彫刻家との交流、会員の親睦など、様々な事業活動を実施できるようになりました。特に会報「いずみ」は質・量とも充実して発行部数も６００に達し、北海道における彫刻芸術の新たなニュース源として広く市民から親しまれるようになりました。

今年は敬愛する彫刻家本郷新先生の生誕１００周年を迎えます。幸いこの周年記念展が札幌芸術の森美術館を主会場として開催されることから、関連市民団体とも密に連携し、草の根市民の立場で本郷新記念事業の成功に向けて全面的な支援を展開したいと願っております。

会員の皆様には友の会の活動に一層のご理解とご参加を心からお願い申しあげます。

もくじ

表紙:「牧歌」(写真:仲野)..... 1
巻頭言:本郷新さんとライスカレー(工藤欣弥)..1
新年のご挨拶(橋本信夫).....3
もくじ.....3
真の力を磨く(逢坂誠).....4
「課題」(米坂ヒデノリ).....6
札幌が好きでやってきました(竹津宜男)...6
〈彫刻家のアトリエ訪問〉
アトリエ訪問とバスツアー(原寿子).....8
白老のアトリエ訪問記(宮崎知佳子)……8
飛生アトリエ訪問ツアーに参加して(小尾陸)...9
本日はオールドニュー(早川敏之).....10
イサム・ノグチ生誕100年とモエレ・ファン・クラブ
(武市毅)....11
アートツーリズム・シンポジウム　ルポ(斎藤一).12
「サンダーロックを札幌へ」に参加して
(斎藤美根子)....13
友の会新年会のご案内.....13
素朴な疑問(榎本真澄).....14
短歌(福井喜美子).....14
東北彫刻めぐりに参加して(菊池満代)….15
札幌彫刻美術館行事予定表.....16
抜海の目.....17
ギャラリーシリーズ7(原典夫).....17
友の会便り.....18

真の力を磨く

逢坂　誠二（ニセコ町長）

「さあみなさん、よく見ましょう。良く聞きましょう。良く考えましょう。」

アメリア・アレナスさんと会ってから、一年が過ぎた。そのとき、彼女から私が受けた強いインパクトは、今も決して色褪せてはいない。それどころか、時間の経過とともに彼女の印象がますます強まってくる。

昨年秋、ニセコ小学校で美術の特別授業が行なわれた。

講師は、ニューヨーク近代美術館で美術教育プログラムの専門家として活躍したアメリア・アレナスさん。日本の各地で、鑑賞教育について講演を行なうために来日し、ニセコには温泉で休息をするため立ち寄った。

「せっかくニセコに行くのだから、何かできることは？」

たまたま、アメリアさんの来日に私の知人が同行していたこともあって、大変好意的な申し出を受けた。教育委員会に頼み込んで特別授業の実施を決めた。対象は、ニセコ小4年生と先生たちだ。

世界的に評価の高いアメリアさんの授業が、日本で初めて実現する。

美術作品のスライドを使う授業だという。しかし、内容が良く分からない。しかも、コミュニケーションがままならない外国人が講師だ。難解でつまらない授業だったら、無理をして授業日程をやり繰りした小学校の先生たちにも顔向けができない。授業への不安が募る。

子供たちを無造作に教室の床に座らせ、アメリア先生が、ゆっくりと話し出す。

授業が始まった。

「さあ、スライドを良く見てね。何が描いてありますか。良く見てよ。まだ喋らなくていいよ。何が描いてあるか、良く見てね。」

通訳を介して、アメリア先生の言葉が子供たちに伝えられる。スクリーンには、二人の人が描かれた絵が映っている。美術鑑賞の授業だが、作者も題名も絵に関する情報は何も知らせてはくれない。ちょっと不親切だとも感ずる。

アメリア先生は子供たちに再度「何が描かれている」、そして「題名をつけてね」と問いかける。

暗幕を引いた薄暗い教室の後ろで見ている私には、先生を取り囲むように床に座っている子供たちが、一瞬にしてアメリア先生の世界に引き込まれているのが分かる。しかし、まだ子供たちが喋る場面ではない。

スライドを凝視し始めて、しばしの時間が経過した。

「さあ何が描いてあったか、話してみよう。」

絵を見ている時間が、ちょっと長かったためか、子供たちは喋りたくて仕方がなさそうだ。堰を切ったように話そうとする子供もいるが、アメリア先生が続ける。

「お友達の話を良く聞いてね。誰かが喋っているときは、その話を良く聞くのよ。」

やっと子供たちが話す場面になった。

「殺し合っているのかな」、「仲の良い姉妹だと思う」、「血管が繋がっているよ」、「血を分け合ったのかな」などと色々な意見が出される。

繰り返し喋りたそうな子供もいるが、先生は全体のバランスを見ながら、おとなしそうな子供にも目配りをして、次々と子供たちから言葉を引き出してゆく。普段、口数の少ない子供までが、意見を述べたという。それは魔法か催眠術のようにも見える。

「なぜこんなに違った意見が出るのだろうか。みんなよく考えてね。」

今度は、絵を離れ他人の意見に関心を惹きつける。そして子供同士の意見交換が始まる。

５枚のスライドを見終わってみると、あっという間の９０分だった。

＊ スライドを見る
＊ 子どもたちがスライドについて意見を話す
＊ 仲間の意見をしっかり聞く
＊ さらに意見を続ける

整理をしてみれば、たったこれだけのことだ。しかし、その内容は、この作業手順の箇条書きでは、まったく伝えられないものだ。子供の目が輝いている。自分の言葉で喋っている。そして子供たちが他者を意識している。

これは私が知っている美術鑑賞、たとえば作者の経歴とか、色使いとか、構図、美術史上の位置づけなどを知らされる、そんなものではない。

いかにモノを見るのか、何を考え、どう意見を述べ、人の話を受け入れ、人との違いを知り、さらに考えるなど、観察し、考え、想像するための基礎が包含されている。

授業終了後、アメリアさんと話をした。

「美術館の絵の脇にある解説が邪魔なの。あれを読む必要はないわ。絵そのものから感ずることが大事よ。」

ガツンと一撃、頭を殴られた気分だ。

そうなのだ。これが基礎だ。何かを感じ、モノを考える基礎はこれだ。予め用意されたマニュアルから知識を得て、記憶したことを披瀝することではない。既成概念から抜け出して真にモノを考えるとは、このことだ。これによって初めて独創性や個性が磨かれる。

もし子供のころに私がこうした授業を受けていたらどうだっただろうか。もっと感性が磨かれたかもしれない。もっと人の話を聞き、多くの人の意見の違いを容認でき、それでいて独創性が高まったかもしれない。

思いかえしてみると、子供の頃の図画工作の授業は、作業をすることが中心だった。絵を描く、粘土でなにかを作る、版画、工作など、創作中心の授業だった。絵画鑑賞の授業もあったはずだが、作者と絵の特色などを覚えるもので退屈だった。図画工作や美術の授業とは動的な作業を伴うものであり、静的なものではないとの先入観が出来上がっていた。

ましてや美術鑑賞から、思考力やコミュニケーション能力、人の多様性などが学べるとは思ってもみなかったが、アメリアさんの授業を通してみると、それは大きな間違いであることが分かる。

アメリアさんの手法は、一見単純に見える。しかし、それは極めて論理的な考えの上に成り立っているようだ。

授業終了後、彼女は、人間の成長にともなう思考パターンの変化やサルからヒトへの生物学的進化にともなう思考発達の変遷などを、立て板に水が流れるように話し出した。

彼女は、美術作品や美術史に関する知識に加え、人間の思考について、あふれ出るほどの膨大な知識を持っているのだ。９歳から１３歳までの子どもの思考の変遷や猿人から人への変化について、深い理論背景を持っている。だからこそ、美術鑑賞授業が、多面的なもののとらえ方や議論の仕方などを学ぶ場になり、絵とは何かまでをも問う場になりうるのだ。

こうしたアメリアさんの授業がある一方で、あらゆる面であまりにも安直に成果を求めがちな私たちがいる。教育の場においても、「ゆとり重視」か「学力重視」かの狭間で、極めて安直に行ったり来たりしながら子供たちと教育の現場に混乱をもたらしている。

真の力を養うとは、もっと別の深淵な知恵の奥に潜んでいるものなのだ。アメリアさんとの出会いの中で、このことを強烈に叩き込まれた。私は、この刺激を一生大切にしたいと思う。

E-mail : ohsaka@seagreen.ocn.ne.jp
http://www5a.biglobe.ne.jp/~niseko

「課題」

米坂ヒデノリ（彫刻家）

美術館の評価は、入館者の数によって決まる。好むと好まざるとにかかわらずである。設置・管理者は、テレビの視聴率を気にするスポンサーと同じレベルなのかもしれない。中身の濃さとか、運営にたずさわる縁の下の力持ちや、社会教育の中で果たす己の役割とか、チェックポイントはいくつかある筈なのに。ひたすら入場者数が頼りというのは、何とも情けない。

目先の変った催しで人寄せができると考えるなら、見せ物小屋の興行師と同じこと。その筋の人を呼び、その席に据えればいいのだ。金のないのはどこも同じで、乏しさを売りものにしてはなるまい。

ヴァン・ゴッホが生前、どれだけ対象を見据え、壮絶な生き方をしたか。式場隆三郎のような精神科医によって解明するまでもない。全ては時代の産物、地域社会の病理のせいだ。偉大な芸術家を生み出すことができた土地は、それだけで大きな遺産をもらっていることを識るべきなのだ。

荻原碌山が郷里穂高で手厚く扱われていることや、中原悌二郎が尋常小学校3年まで釧路で生活していたことは、郷土の副読本にも記載はない。政治、経済界で成功した人か、せいぜい著名な科学者どまり。戦前ならば軍人がトップに据えられて、子供達の心をくすぐる。そんな風土に気の利いた人間の育つわけがない。

この国では、どこかがゆがんでいるような気がする。どうしてこんな風になってしまったのかわからないけれど、多分、他国を侵しても侵されたことのない歴史的な国民性がそうさせたものではないか。但し、例外はアメリカ。

７０年も昔に作られたフランスの映画「大いなる幻影」は、見る度に新鮮だ。監督のジャン・ルノワールは画家オーギュスト・ルノワールの長男。人種問題も階級も、国境さえも永遠の幻影ではないか、と彼はシニカルな目を向ける。

私たちは、ひたすら火つけ、泥棒、人殺しをしない人間を育てることなのだ。

戦禍の中の母子像　’04自由美術展

「札幌が好きでやって来ました」

竹津宜男
（ＰＭＦオペレーテイング・デレクター）

札幌へは１９６０年に藤原歌劇団の歌劇「カルメン」公演のオーケストラの一員として初めてやって参りました。狸小路は大勢の人出で賑わい、大通公園の両脇にはレストランや喫茶店があって散策の途中で食事やコーヒーを飲みに入ることが出来る楽しい場所でした。仲間と「素敵な街だねー」と語り合ったものです。

翌’６１年、札幌交響楽団が誕生し楽団員として札幌に住むようになりました。その後段々と札幌の中心部が楽しい場所でなくなって来ました。原因はドーナッツ現象で街の人が郊外に住むようになり、街に人が住まなくなっ

たからです。狸小路も商店主は郊外に住みショーウィンドの飾りつけは広告代理店に任せ、通いの使用人が店番し、きれいになった店はよそよそしくなってきたのです。大通公園は銀行などの両側のビルが午後３時になるとシャッターを降ろして殺風景になってしまったのです。

‘８２年に大阪の「ザ・シンフォニーホール」が落成しました。日本を代表するオーケストラと言われた札響は柿落としに呼ばれました。札響にふさわしい響きの良い素敵なホールでした。このホールを札幌に建てたいとその時心の中に強く思いました。

その頃、札幌青年会議所（札幌ＪＣ）の都市文化委員会が「札幌のアイデンティティー」について連日議論をしていました。結果、「欧米では都市の文化度はオーケストラで判断する」のが常識、札響の強化と売り出しが目下の急務と方向が出ました。札幌ＪＣと私の願いがはからずも一致しました。ＪＣは市民の関心を札響に向ける手立てとして「交響詩さっぽろ」運動を始めました。作詞も作曲も公募と思っていたのですが協議の末作詞は作詞家にお願いすることにし、曲を作るプロセスとして「１小節運動」を始めました。「交響詩さっぽろ」のオーケストラの楽譜の１小節を３千円で買って下さいというものでした。この運動の最中に７回のシンポジュームが開催されました。このシンポジュームで私は「素敵なホールを作ってそれを中心に札幌の街を公園化することを考えよう」と訴えました。

様々なアイディアが出ました。例えば「まだアーケードの付いていない狸小路の８丁目から１０丁目を使ってオペラハウスを作り狸小路を劇場の門前市にする、両側には質素で堅牢で家賃の安いゆったりした幾世代に亙っても快適に暮らせる間取りの広いアパートを建て、そこにまずオペラハウスで働く職人さん達に住んでもらう。街の中心に人が暮らせる札幌を取り戻そう」と言うのもありました。狸小路商店会青年部は大賛成でしたが既に地権者が幾度も替わっていて実現出来そうにありませんでした。

ホールは実現出来そうな気がしました。「ホールを中心に札幌を公園化」では壮大な設計図を画きました。場所は８万平米ある豊平墓地の跡地。豊平町は札響の誕生と同じ年に札幌市に合併されたのですが２０年経って札響は日本を代表オーケストラと言われるほどに成長したのに豊平町は相変わらず川向こうの田舎町でした。豊平墓地の跡を劇場公園にして１００年かけてコンサートホール、能楽堂、芝居の劇場、オペラハウスを建てすぐ近くに出来る地下鉄の駅名も「札幌シアターパーク・ステーション」にする。この劇場公園から大通公園につながる新しい大通りを作り札幌の中心部と豊平を１つの街にする、２２世紀を睨んだアイディアでした。

街に住む人が文化を愛でて楽しそうに暮らしていたら他所の土地から人は集まってくるものです。祭りも伝統的な祭りを少し脚色して時代時代に合わせたものは営々と続き人を呼び集めるものです。

札幌が観光都市を標榜するからには市民が本当に文化的に楽しい街に生まれ変わらせることを考えなくてはならないように思います。

アトリエ訪問と日帰りバスツアー

原　寿子(会員)

主催　札幌彫刻美術館友の会
日時　平成１６年１０月２日（土）
参加者　会員３１名、一般１７名、計４８名
「飛生アートコミュニテーと
虎杖浜の温泉を訪ねて」

曇り空の下、自称“晴れ男”の橋本会長の挨拶を信じて定刻に出発しました。

飛生アートコミュニテーは、戦後開拓に入った人たちの小学校が昭和６１年に廃校となり、その校舎をアトリエに転用されたことに始まります。現在、「北の彫刻展　２００４　新しい具象」に出品された伴翼氏をはじめ、國松希根太氏、小泉紗綾氏、新井睦昭氏等の若い作家たちが住み着いて制作に励んでいます。

バスの中では、斎藤美年子さんから「四人の作家のプロフィールについて」、次に「札幌から白老までにある彫刻作品～北広島１５点、恵庭１０点、千歳１９点、苫小牧３９点、白老１２点～」について会員の仲野さんから教わりました。彫刻作品について造形の深い会員から、バスツアーの折りに多く学べることは有難いことです。

木造平屋建てのアートコミュニテーには４人の作家達の作品等が展示されていて、自己紹介の後、参加者の質問に丁寧に応える４人の若者達の夢に溢れた瞳が印象的でした。朽ちた日時計や国旗掲揚ポールのある校庭には大きな作品が置かれていました。資材置き場になっている屋内体育館の壁には校歌や学校の目標が今も掲げられ、廊下にある今週の目標「廃校式を真面目にやる」の文字の向こうから２０年前の子供達の声が聞こえてくるようでした。冬の寒さや暮らしの不自由さの中でも、目標を持って生きる若い人たちは幸せだと思いました。

太平洋の海が見渡せる虎杖浜ホテルビューラメールでは、四人の作家も一緒に昼食と温泉を楽しみ、顔なじみになった参加者の方々との会話もはずんで、虎杖浜特産の海産物のお土産を手に予定通りのツアーを終えました

白老のアトリエ訪問記

宮崎知佳子

秋の一日　アトリエの作家たちを訪ねるバス・ツアーに参加しました。廃校を根城にする若き芸術家たちというだけでも興味深いのに、飛生（とびう）という耳慣れない地名の響きが、ますます想像力をかき立てます。

秋色に染まる草原の奥に、ひっそりと懐かしい木造の学校がありました。一歩入ると、そこは不思議な魅力とパワーにあふれた空間でした。所狭しと並べられた彼らの作品が、個性を主張し、キラリと光る感性を放っています。

伴　翼氏の石と木を組み合わせたユニークなオブジェ。國松希根太氏のシュールな造形に見とれてしまいました。それぞれに偉大な父を持つ息子たちとあっては、つい凡人には思い及ばぬ心の軌跡があるのでは？と思いましたが、清潔感あふれ、ユーモアたっぷりの応対には大変好感がもてました。

見渡せば各部屋に、しゃれたデザインの座りよさそうなイスや足の長い鏡台が無造作に置かれています。木工作品に取り組む新井睦昭氏の作品です。誠実で暖かい人柄を感じました。若い方達の信頼も絶大であろうと思いました。紅一点の小泉紗綾さんの木彫りにおける曲線もとても新鮮でした。また紅茶の心配りが嬉しく、寒い日でしたので皆さん、おいしく頂きました。

四人の方々にはその後も食事や温泉につき合って頂きました。親子ほどの年齢差のおばさん達の質問攻めに合い、“先生”と呼ばれる度にクスッとする姿が初々しく、白樺の若木のようでした。

これからの年月、広い世界での経験や悩みを乗り越えることで、表現にも磨きが掛かることでしょう。自分達の人生を彫り込むことが作品に陰影と深みを与えるのだろうと思いました。

いつの日か、成熟したワインのような芳醇さをたたえた彼らの作品に出会えることを祈り、また飛生の里から大きく飛び立って欲しいと思いつつ帰路につきました。（ツアー参加者）

飛生アトリエ訪問ツアーに参加して

小尾　陞（たかし）　（会員）

本年秋の「アトリエ訪問ツアー」は10月2日に行われました。定員の45名を上回る申込があって、やむなく若干名の方はお断りしたとの事で、貸し切りバスは満席でした。当日は曇り空でしたが、橋本会長の「私は晴れ男です、今日の天気は大丈夫、保証します」との挨拶の言葉どおり、快晴にはなりませんでしたが、天気の方は何の差し障りもなくツアーを終えることができました。

目的地は白老町ですが途中通過する市に設置されている野外彫刻の概要が、それぞれの市の特徴と共に仲野さんより解説がありました。説明の最後に、維持管理が極めて悪いものがあり、「設置したからには責任をもって維持管理し、いつ見てもこころよく鑑賞できる状況に保って欲しい」との感想意見がありました。

日頃、私も苦々しく思っていたことですが、旭川では彫刻美術館が野外彫刻清掃ボランティアを募集し、居住地別に6つの班に組織して、1～2ヵ月ごとに作品を清掃・点検しているとのことで、札幌を含めて全ての都市で見習うべきことではないかと思いました。

訪問先は白老町の飛生（とびう）アートコミュニティーで、白老の街はずれの山側に入った所にあって、離農で廃校となった旧飛生小学校を町から借用して活用しているもので、参加している作家は「北の彫刻展2004－新しい具象－」に出品された伴翼氏および木工の新井睦昭氏、彫刻の國松希根太氏（明日香氏のご子息）、小泉紗綾氏の4名のアトリエです。

最初に4人そろっての挨拶と伴氏よりアトリエの説明があり、それから1時間ほど見学しましたが、学校の教室と体育館を利用しているのでそれなりの広さはあるのですが、4人で活用しているため特に余裕があるとは思えませんでした。そして既に完成した作品、製作途上の作品、それにこれから取りかかるための材料、木工、金工などの諸作業道具類が所せましと場所を占め、あたかも小工場を思わせる雰囲気でした。

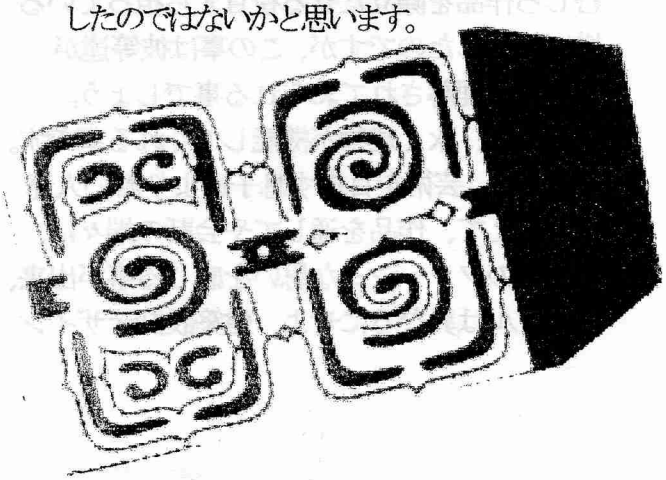
そして痛切に感じたことは、彫刻をやるためには

（写真左から荒井・伴・國松・小泉氏）

これだけの設備を揃えねばならず、それに材料といってもそれなりの購入費用がかかることを考えると、画家でも「世に出る」までは大変ですが、彫刻の場合には「絵」とは比較にならない程の大変さがあるということです。

それはこれまでも何人かのアトリエを見学させて戴きましたが、いずれも既にそれなりに世に出ている「有名作家」であって、今回の場合は、それぞれ種々の賞を受賞し、将来を嘱望されてはいるものの、若手であって「これからの人」であったためと思われます。芸術家として「名をなす」ためには致し方ない面ありますが、日本が「文化国家」であるならば、若手育成のためには何等かの特別な援助が必要なのではないかと強く思いました。

見学のあとは4人の作家も参加して虎杖浜温泉のホテルビューラメールで昼食、温泉にも入って参加者相互の交流親睦をはかりました。虎杖浜温泉は国道沿いに数軒のホテルがありますが、ビューラメールは海岸側の裏道沿いで、絶好の景色の所にある瀟洒なホテルで、参加者は食事内容とともに満足したのではないかと思います。



本日はオールドニュー

彫刻家のアトリエ訪問

建築家
早川敏之（会員）

新芽に出会う事は、風景全ての場面で心地良い事で、その心地良さにも似た心地良さを、久し振りに味わう事がこのツアーで出来ました。
新芽とは、まず既に機能を果たし終えた古い木造校舎に、再びアトリエという機能を吹き込み、再利用してくれている人達に出会えた事。
高齢化社会が既に来ている人間社会で、定年という一区切りを成し終え、まだ充分に社会に適応可能な人材がありながら、活用システムが、かならずしも満足に出来ていない世情とオーバーラップする訳であり、建築畑を45年歩いて、福祉関係にも関心を持つ者として、建築物の末路的思考と、人としての福祉的思考から、考えさせられるのを感じたのです。
以前、留萌支庁増毛町の小学校の木造校舎が、解体と保存とに地元で意見が２分して議論された時、建築の分野から意見を述べさせて頂く機会がありましたが、その折には、保存を強く希望した事を覚えております。
結果、幸いにいくつかの選択肢の中で保存が決まり、北海道遺産に指定されました。
過去には、至る所で古き良き時代の建物が機能が古くなったとの理由で、解体の憂き目に逢ったのですが、幸いにしてここの建物は、解体から救われて今尚使用されていますが、大きな手を加えた様子もありませんので、いずれはその憂き目が来ないとも限りません。
しかし見た限りでは、彼等達の作品と、この古い元校舎は、全くの違和感もなく融合して、むしろ作品を際立たせる役目すら担っている様にも感じたのですが、この事は彼等達が一番良く理解されておられる事でしょう。
願わくは、永く建物が機能してくれる事です。
2つ目に、芸術を目指す息子達より若い人達に出会えて、作品を通してや会話の端々に、彼等達のフレッシュな思いを感じる事が出来、ジャンルは異なるにせよ、建築設計デザインに関わる者として、芸術性を追求する姿勢に共感するものを、年齢を超えて見い出せたからなのです。
３つめに、建築活動を通してやライフワークの、作品の私の考えは、単純で且つ素朴であり、長期では自然体が一番相応しい。
確かに造形美とは、かならずしも単純で素朴だけではない事も充分承知しておりますが、改めて彼等達の現在見る限りでは、その事に於いても共感出来るものがあったのです。
その中で、ある木彫はアフリカの原住民の面を彷彿させるものがありました。
私が興味を持ったのは、複数の作品自体は勿論ですが、そこに至るヒントが何処から来たのかと言う事なのです。
無限大にある形状から、一つの形を創り上げる過程の脳みその部分で・・。
あるいは、木の場合では既に木そのものの持つ性格を見い出して形にする事も考えられますし、既に設置場所が決まった作品であれば、予めイメージする事も可能でしょう。
一昨年、私の事務所で雄冬に建つ住宅の設計を依頼されたのですが、３５帖の居間に合う家具が見つからずに製作をしてしまったのですが、食卓テーブルに使用した材木は、樹齢９００年程の赤花梨の木でした。
現場に６人掛かりで搬入した記憶があります。
ある意味では、建築と違いまして制約がなく、デザイン出来る彫刻が羨ましく感じますし、反面、制約が無い分、苦しいと思うのです。

新芽はやがては実になる

いずれにせよ今回もアートツーリズムの主旨が遺憾なく発揮された企画であった事、大変有意義な一日でした。　感謝

老いて美なり、
美は不老なり
敏之

（良き時代の名残を留めるアトリエ）

イサム・ノグチ生誕百年とモエレ・ファン・クラブ

武市　毅　（モエレ沼公園の活用を考える会）

友の会の皆様、新しい年、そして本郷新さんの生誕百年おめでとうございます。昨年は本郷さんより一足先にイサム・ノグチの生誕百年を迎えました。今回はそんなご縁もあり、モエレ沼公園の活用を考える会（モエレ・ファン・クラブ）の活動の一端をご紹介させて頂きます。

ノグチが現地を訪れ、ゴミが舞う荒野に「ここにはフォルムが必要。これは僕の仕事です。」と強い情熱を燃やしマスタープランを完成させたのは1988年11月。それから16年の歳月を経、ノグチ生誕百年の2004年度に、公園は全面完成を迎えました。

いくつもの山やピラミッドが屹立し、大胆にシンプルに構成された大地は、太古の遺跡の様な聖的な美しさとダイナミズムで私たちの五感を解き放ちます。ゴミ処分場は子どもたちへ捧げられた美しくも楽しいプレイグラウンドへと再生され、その空間は私たちの情景が加わることでいっそう輝きを増すようです。

私たちの会は、モエレ沼公園が「生活の中に生き生きと息づく公園」「子どもたちの心を育む空間」として活用され、将来に亘り美しい公園として引き継がれることを念願し、平成15年に発足しました。高い可能性を持つ公園の管理運営を行政任せにするのではなく、利用する市民の側がしっかり見守りサポートする、そんな協働と協創のまちづくりを進めたいと願ってのことでした。

活動2年目の昨年は、ノグチ生誕百年事業への取組みを目標とし、市と協働での展覧会「イサム・ノグチ、ユーラシア遺跡の探訪展」を開催しました。これに先立ち、評論家の酒井忠康氏を招いての講演会を催しましたが、その際には橋本信夫会長にご出演いただき、ノグチとの交流などの貴重な体験をお話しいただきました。この場をお借りし、重ねてお礼を申し上げます。

子どもの日や夏休みには、子どもたちとの楽しいワークショップを開催、今後さらに活動を充実させていきたいと願っています。ホームページは http://www.moerefan.com/ です。是非ご覧になってみてください。そして一人でも多くの方が私たちと共に活動していただけるとうれしく思います。

初夏にはモエレ沼公園がいよいよグランドオープン、私たちの取組みにもご期待ください。

私たちは今、ノグチの彫刻「サンダーロック」を札幌に残したいと、署名運動を行っています。サンダーロックは１９９８年に芸術の森美術館で開催された「イサム・ノグチ展」の出品作品としてニューヨークから運ばれたもので、高さも幅も２m強、自然石（万成石）の風合いを生かしたノグチ晩年の大作です。これまでの間、購入を前提として札幌市がイサム・ノグチ財団から賃貸してきたものですが、市は財政事情などから、今年度末に返却することを決定してしまいました。

私たちはこの事態に、何よりも作品がふさわしい場所で鑑賞されることを願い、ノグチの創作の心を伝える作品として札幌に残して欲しいと、同財団にお願いすることを決意しました。そして昨年の11月17日、ノグチ100歳の誕生日に合せ、署名3550筆と嘆願文をニューヨークへと届けたのです。嘆願文には、原子修さんがこのために書いて下さった詩を添えて。

私たちは交渉の第一歩に踏み出したばかりであり、3月末まで署名運動を継続しています。友の会の皆様にご理解、ご協力をいただけると大変うれしく思います。

私は１０年以上前、宮の森緑地に「太陽の母子」を設置する仕事に関わり、何度か美術館に出向くうちに、本郷さんの彫刻は私の身近なものとなりました。今、書きながら、好きだったトルソー、「北の彫刻展」の様子、美術館を中心とした閑静な街並みなどを懐かしく思い出しています。

今年は本郷さんの生誕百年、ノグチと一歳違いであったことに軽い驚きを覚えつつ、骨太でヒューマンな本郷さんの作品が美術館と共に愛されつづけることを願わずにはいられません。

アートツーリズムシンポジウム ルポ

斎藤　一　（北海道情報大学　講師）

平成１６年１１月５日（金），観光情報学会さっぽろ観光情報学研究会の主催により，モエレ沼公園HIDAMARI（ガラスのピラミッド）1Fスペース１においてアートツーリズム研究プロジェクト推進キックオフシンポジウムが開催されました．

シンポジウムは，北海道において，野外彫刻などの芸術コンテンツと密接に結びついた新しいツーリズム（アートツーリズム）を確立させるべく，そのムーブメントの担い手として積極的に参加を希望される，あるいは是非参加を促したい団体および個人の方を対象として，北海道と札幌の芸術的な資産を確認しながら，さまざまな論議を行うという主旨で開催されました．

シンポジウムは，北海道CMC株式会社　新保美輪さんの司会により，観光情報学会会長であり，アートツーリズム研究プロジェクトリーダである北海道大学　大内　東教授による挨拶で始まりました．挨拶に先立ちまして，先日，心不全により急死された観光情報学会監事であり，学会の立ち上げから運営までご尽力頂きました札幌総合情報センターの故・坂田昇氏の追悼のために参加者全員による一分間の黙祷が捧げられました．その後，プロジェクトの主旨の説明がされました．

つづいて，３つの研究事例が紹介されました．私は「オープンソースを利用した彫刻Webデータベースの開発」と題しまして，北海道彫刻Webの開発状況などを発表させて頂きました．開発にはXOOPS（ズープス）というオープンソースシステムを利用しています．XOOPSを利用することで，野外彫刻写真と地域情報を組み合わせたコミュニティサイトを構築することができるようになります．

次に，北海道ＣＭＣ株式会社の日下勇人氏により，「観光向け3DWebシステム」の紹介がありました．航空写真／衛星画像の実写地図映像を取りこみ，複数の3D映像コンテンツを融合したブロードバンドコンテンツを北海道の観光ガイドとして利用するデモをして頂きました．

３つ目の事例紹介としまして，北海道東海大学の吉村卓也助教授により札幌市公式観光情報Webサイトである「ようこそさっぽろ」を通して，取材時の談話などを含め，アートツーリズムに関連するコンテンツの紹介をして頂きました．

休憩を挟んで，札幌市観光文化局局長　北野靖尋氏に挨拶をいただきました．また，札幌市の観光振興の取り組みについてお話頂きました．

つづいて，札幌彫刻美術館友の会の橋本先生が編集された仲野氏の野外彫刻写真のスライドをバックにパネルディスカッションが始まりました．コーディネーターは，シビックメディアの杉山幹夫氏，パネラーには，北大大学院文学研究科の北村清彦教授，PMF組織委員会の竹津宜男氏，㈱JALセールス北海道支社　後藤田美幸氏，観光情報学会の副会長でもある㈱ツアーネットの北山憲武氏をお迎えして「アートツーリズムってなんだろう？」をテーマに，様々な観点でアートツーリズムについてご議論頂きました．アートリテラシー（アートの見方を学ぶこと・あらゆる自分の周りのものをアートとして捉えること）の重要性，これからは客観的でホットな観光情報を発信できる技術が地域にとって重要なことなど，紙面の関係ですべては紹介できませんが，プロジェクトを進めていく上で参考となる重要な意見が盛りだくさんの内容となりました．

お陰様でシンポジウムは大成功で終えることができました．短期間で準備を行ったにも関わらず，２団体からの協賛，そして，３６もの団体からの後援を頂くことができました．後援依頼の件を含めまして，札幌彫刻美術館友の会の方々には，多大なご協力を頂きました．この紙面をお借りしまして，改めまして感謝申し上げます．来年はいよいよ本郷新の生誕１００周年を迎え，アートツーリズム研究プロジェクトも，ますます活発になります．今後とも，ご指導ご鞭撻を，よろしくお願い申し上げます．

イサム・ノグチ晩年の大作

サンダーロックを札幌へ

に参加して

斎藤美年子（副会長）

平成１６年１０月１５日１８時から、札幌豊平館においてモエレファンクラブ主催により「サンダーロックを考える集い」が開催された。

現在芸術の森美術館の中庭にあるイサム・ノグチによる直径約２メートル・重さ１０数トンのサンダーロックは（８１～８２年作）、自然の質感を保つ岡山県万成産の花崗岩で作られている。１９９８年に同美術館のイサム・ノグチ展で初公開された作品を、今回「札幌に残して」とフアンが署名活動に取り組むことになった。

小林英嗣代表よるイサム・ノグチとのモエレ沼における出会いのお話しに続いて、ゲストの川村純一氏（建築家）からサンダーロックを是非札幌に残したい！！との要請、さらに司会の林美香子氏よりゲスト和泉正敏氏（欠席、牟礼市在住の彫刻家・石匠）の「ロックを札幌に」との願いのこもった電報の披露がなされた。

札幌彫刻美術館初代館長原子修氏（詩人）からは、次世代に伝える大事な財産であるサンダーロックについて深い思いを込めて「不死のあなた～彫刻家イサム・ノグチ～」と題して“あなたの研ぎすました業の鑿の指が億万年の沈黙に氷る石をノックするとき”… とご自作を朗読され、会場は感動に包まれた。

多くの人の署名によってサンダーロックがモエレ沼に設置されるとき、イサム・ノグチと札幌市との絆を深める証としてより一層の存在感を示すことになるであろう。

札幌彫刻美術館友の会からも橋本会長をはじめ多数が参加し、趣旨に賛同しながら署名簿に記入した。

なお、１１月１３日のモエレ・フアン・クラブによる、「２００４ブラック・スライド・マントラお清掃の会&イサム・ノグチさんお誕生日会」（大通公園）までに、市民の署名は３５８０余名に達したとのことある。

友の会便り

友の会の講演会と新年会

◎日時：平成１７年1月２２日（土）
　講演会　　１１時００分～１２時００分
　新年会　　１２時００分～１４時００分

◎会場：札幌第一ホテル別館２Ｆ
　札幌市中央区大通西９丁目
　電話：２２１－１１０１

◎会費：３、５００円

◎出欠：同封の「はがき」で
　1月１５日（土）までにご連絡下さい

◎連絡先：斎藤美年子
　電話とFax　６４３－７２４６

・・・・・・講演会プログラム・・・・・・

演者：奥岡茂雄先生

札幌芸術の森美術館館長
北海道浅井学園大学教授

演題：

「芸術は人なり～体験的美術私論」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

役員会と編集委員会
　同日１０時～１１時まで；部室３Ｆ“いずみ”

素朴な疑問

榎本真澄　（会員）

雪が遅ければこれ幸いと、冬支度もノロノロし、結局冬は必ず来るのにと、毎年言い訳のぎりぎりセーフを決め込んでいる。雪景色も嫌いではないのだが、自転車で道草できる期間が、籠もりがちな冬の分の貯金のようになっている。幾つかの用事を同時進行で、それなりにこなせた時期は去り、今は新聞・情報誌の類も、蛍光ペンを片手に印をつけ、落ち度はないかと、しくじりの多くなった自分と向き合っている。その切り抜き癖が、時におまけを連れて来てくれる。用足しの隙間に足を止める石碑や野外彫刻は、その場の雰囲気を重厚なモノにしてくれているような気がするのである。

華やかな除幕式で設置されていたはずの彼等が、いまは何とか邪魔にならないようひっそり佇んでいる。レンガや石造りの建物の多い街にでも似たような感覚になる。造り物が、地球に馴染んでくるといつか思いもよらないことになるらしい。

ところで野外彫刻はこれほど汚れるものなのか？清掃って難しいのだろうか。数年前になるが、史跡巡りのサークルで、石碑や野外彫刻をかなりの数訪れる機会があった。どこでも、鳥のフンまみれの白い帯に、「なんとかならないものか？」という声が上がったが、引っ込み思案なので、誰かが音頭を取ってくれれば駆けつけたい！程度に収まった。やがてサークルも終了し、そんな話をしたことも多くの人は忘れていった。しかし私たちと同じようないでたちの観光客が、札幌のガイドブックを手に、にこやかに汚れた像の前で記念撮影をしている。この遠来のお客様に、市民としては少しばかりの負い目を感じてしまう。

私たちの普段の暮らしでは、法律を意識することはあまりないが、道端に花を植えるにしろ、草むしりをするにしろ、むやみやたらの善意だけでは咎められることもあると聞く。

聳えるように、また隠れるように存在するどの野外彫刻にも所属するところがあるに違いない。持ち主に断りもなく雑巾がけするのも気が引ける。ましてや対象が芸術品なだけにしろうとには厄介である。

小耳に挟んだ話、旭川の美術館には、彫刻サポート隊なるボランテアが存在し、札幌から３年間も通っている人がいるのだそうだ。大通公園のブラック・スライド・マントラも、有志の手できれいになったという。
お金をかけずとも、やる気と時間の遣り繰りで心が温かくなる方法か、何かがあるような気がする。キーボード一つで世界の情報を一挙に共有できるユビキタス時代！みんなが快適と感ずる環境づくりや方向づけを選んだ方が、自分を含めた大切な人にしあわせが多くなるように思えるのだけれど・・・。

短歌

福井喜美子（会員）

彫刻家本郷新の旧アトリエを
　訪はむとはるかの山を登りぬ

窓ガラス割れしも露にカーテンの
　重く垂れをり旧アトリエに

廃屋の窓に迫りて木々の間に
　張碓の海風ぎゐるが見ゆ

笹原に抜き出でて白きハナウドに
　羽やすめをり蜻蛉がひとつ

「東北彫刻めぐり」に参加して

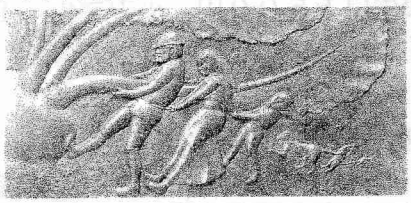
菊地満代（会員）

9月15日～17日のツアーに芸術の森の仲間3人と楽しく有意義に参加させて頂きました。美術館の「空港から空港までバスです。年輩の方でも大丈夫ですよ」との案内にひかれて申し込んだのですが、出かければそれ「野外彫刻鑑賞の醍醐味はその足で発見する事にあり」の鉄則は曲げられず、気が付けばいつのまにか持病の膝痛も忘れ彫刻見たさに走り回った3日間となりました。加えて走行300kmを超えたバスの車窓からは、高い青空の下で稲穂が金色に輝く秋の東北の田園風景や、どこか懐かしさを覚えさせてくれる旧城下町の佇まい等もたっぷり味あわせてもらいました。

この風土から生まれた作品との出会い～宮城といえば佐藤忠良、岩手といえば舟越保武でしょう。共に1912年生まれで1934年東京美術学校彫刻科に入学し生涯に渡って深い友情に結ばれていたと聞きます。今回の旅は圧倒的に二人の作品が多く、そのためか全体的に落ち着いた印象の彫刻紀行になったように思います。

1日目、空港から宮城県立美術館隣接の佐藤忠良記念館へ。＜群馬の人＞から始まる数々の卓越した造形力の作品を鑑賞し、改めて具象彫刻（人体像）の美しさと親しみ易さに納得のゆく思いでした。

帰り道、県立こども病院に立ち寄りましたがここの忠良さんの作品はとても印象深いものでした。大井院長のコンセプトの下、病気と闘う幼い子供たちが少しでも心地よく「住む」ことができるように、現在考え得る最高レベルの設備と心的面でのケアを備えたその病院の玄関を入るとすぐに子供が触れる高さに＜大きなかぶ＞のレリーフが設置されているのです（絵本と構図が左右逆で、一番うしろのねずみさんの何と愛らしいこと！）。ご高齢の忠良さんが病気の子供たちにと制作を快く引き受けて下さったとのこと、絵本と同じように子供達に末永く愛される幸福な作品となることでしょう。



佐藤忠良・作

それにしても、優れた芸術作品が見る人の心に深く寄り添いどれ程の慰めや励ましを与える事ができるか、それは大人も子供も変わらないことで芸術の持つ可能性について深く考えさせられました。

2日目の盛岡はちょうど八幡宮の例大祭とあって山車を引く笛や太鼓の音をBGMに市内を散策しました。中津川周辺や高松公園等、この日の武器は2本の足、喫茶“舷”での小休止は彫刻お宝いっぱいのコーヒーブレイクとなりました。県営運動公園では噴水に囲まれ、燦然と輝く＜青年の像＞とご対面、N・Y市のゴールデンボーイにも負けない若々しさと躍動感、こんなのもたまには良いと思いましたが・・・。

夕暮れのつなぎ大橋脇にくっきりとシルエットを浮かび上がらせている＜シオン＞の像はもう文句なし・・・。

舟越保武・作

3日目はドライブがてらの人々に親しんでもらおうと、道の駅と合体してリニューアルした岩手町石神の丘美術館へ。興味はやはり野外に置かれた20数点の彫刻でした。

午後は宮殿のような岩手県立美術館を訪れ、保武の常設展示室で作家の信仰告白とも思える作品の数々にまとめて出会いました。画家ルオーの「芸術とは人間の仕事の中に神が訪れることだ」という言葉を思い出しながら、鑑賞すると言うよりはむしろ作品と対峙すると言った心持ちになり「あなたは何を信じるか」と囁かれた気がしました。

最後に花巻空港に向かう途中、ぎんどろ公園で記念すべき第1回本郷新賞受賞作品＜風の又三郎群像＞を見て童心に帰り、さらに宮沢賢治記念館では忘れかけていた賢治文学の優しさと哀しみをふと思い起こしたりして彫刻漬けの三日間の大人の遠足は終りました。

三輪館長さんをはじめお世話になった同行の皆様、本当にありがとうございました。

札幌彫刻美術館 平成１７年度 本郷新 前期収蔵品展

本館

ひと　かたち

～躍動する人体の魅力～

１０月１６日（土）～３月２１日（日）

記念館

粗描展　パート ３

～本郷の未公開素描～

１０月１６日（土）～３月２１日（日）

前期 行事予定

札幌彫刻美術館　平成１６年度１月～３月期の行事予定表

１　子ども造形教室（小学生対象）

内容　　小学４年生から６年生を対象に紙を使い動く作品を作ります。
日時　　１月１３日（木）　１０：００～１４：００
場所　　札幌彫刻美術館研修室
定員・参加料　３６名　ひとり　１，０００円
受付　　１２月２１日（火）午前９時から電話受付。先着順

２　造形教室（一般対象）

内容　　制作の基本となるデッサンから始め、粘土を使いテラコッタ〔人物または頭像〕を制作します
日時　　２月１９日（土）、２０日（日）の２日間
定員・参加料　１６名、ひとり５，０００円
受付　　２月１１日（金）午前９時から電話受付。先着順

３　宮の森散策と美術館鑑賞の会　（ステージ６「春雪の三角山」）

内容　　美術館出発～三角山登山～美術館解散
日時　　３月１２日（土）９：３０～１２：００
定員・参加料　５０名　高校生以上５００円、小中学生　１００円
受付　２月２０日（日）午前９時から電話で受付。先着順

申込先　　札幌彫刻美術館　Tel:642-5709

申込先　：　札幌彫刻美術館　Tel:642-5709

「抜海の目」

「誘い出す魅力を」

このたび、図らずも札幌彫刻美術館友の会に仲間入りした。

彫刻美術館の存在を知ってはいたが、正直言ってほとんど訪れたことがない。一度だけ素通りのように足を踏み入れたことはある。かなり以前のことで、ほとんど記憶の断片すらない始末である。

道立近代美術館や三岸好太郎美術館には時たま出向くことがあるが、彫刻美術館には足が遠いのだ。言い訳がましく言えば、最大の理由は地の利の悪さである。札幌市の東端から出かけていく身にとって市の西端にある美術館にはなかなか足が向かない。

と、ここまで書いて思いあたった。札幌芸術の森美術館だって決して交通至便な場所にあるわけではない。しかし、同美術館には彫刻美術館よりは多く行っている。この差は何なのだろうか―。

閑話休題。毎週木曜日の道新朝刊に全道各地の１週間の行事や催しなどを地域ごとにまとめて紹介する「イベントウイクリー」というページがある。

この中に道内主要美術館の展覧会案内が表になって載っている。道立近代美術館を筆頭に道立釧路芸術館まで１１館が並んでいる。各館ごとに展覧会名、会期、休館日、料金、所在地・電話の順に掲載され、美術ファンには便利だ。

残念ながら彫刻美術館は入っていない。似たように個人の作品を収蔵展示している道立三岸好太郎美術館は載っている。

新聞社の掲載基準は分からないが、ここにあるのはすべて道立、市立の公立美術館である。彫刻美術館は財団法人である。このあたりが線引きの基準なのかもしれない。

とすれば、それはそれで仕方がない。ならば、彫刻美術館の知名度、露出度をもっと高めるような魅力ある展覧会、イベントを企画し、筆者のような行かず嫌いを引っ張り出してほしいと思う。

ギャラリーシリーズ7

原　典夫（会員）

ビン・カシワ　アートギャラリー」を訪れて

このギャラリーは、今年の７月に円山裏参道に開設された。ビン・カシワ（本名柏崎敏一）は釧路出身の画家で、１９６６年から１５年間パリに滞在し、ナイーフ派（素朴派）画家としてパリ、ニューヨーク、南米など世界各地で個展を開催。現実と空想がつくる彼独特のナイーブな世界は大いに人気を得たという。その間、「ＮＨＫフランス語講座」の表紙絵を８年間担当した。

帰国後、NHK 画集「ビン・カシワの世界」を刊行。国内各地の百貨店、美術館での巡回展など精力的に活動してきた。ピン・カシワの絵は、パリの古い街並みや人々、自然や飛行船などを主人公に繰り広げられる「メルヘンの世界」を描き上げたもので、色彩も大変綺麗で、国内外に多くのファンがいるという。

近年、出身地の釧路のアトリエで絵画制作に専念しているが、このたびの常設絵画ギャラリー開設を機に、北海道をモチーフとした（時計台・赤レンガの道庁・小樽運河・函館湾など）新作品（原画）を発表しており、札幌を「ビン・カシワの絵画発信拠点」にしようとしている。

ギャラリーは５０平方メートル程の広さだが、ＳＭから２０号位の原画（アクリル）、版画（シルクスクリーン、リトグラフ）、ポスター、ポストカードなど１００点以上の作品が所狭しと展示（販売）されている。

営業時間は１１時―19時、月曜日定休となっているが、毎月　道内や首都圏などの各地に巡回展に出ていてクローズする場合があるので、予め電話するのがよい。

札幌市中央区南1条西22丁目2－1
シーズンビル3F
TEL・FAX：011－631－1222
ギャラリー代表　石倉　英男さん

友の会便り

「本郷新の彫刻が高知県にもあった！」

船迫吉江（会員）

「日本の絶滅危惧植物図譜」出版を記念して新宿御苑を皮切りに巡回展が催され、最後の展覧会場が高知県の県立牧野植物園でした。

１ヶ月の会期中に会員の研修会があり、私も参加しました。この植物園は「植物学の父」といわれた牧野富太郎博士を顕彰するために昭和３３年に開園しました。その後平成１１年に植物に関する研究と市民の生涯学習の場として牧野富太郎記念館が新設され、博士の蔵書、植物画、原稿など５万８千点を収蔵する文庫も加わりました。

この文庫に入るために階段を降りて地下に向かう所に牧野博士の像がありました。作者名を見ると本郷新です。「え！」こんな所にも作品があったと思い、記念撮影しました。

札幌彫刻美術館との関わりがなければ目にとまらなかったことでしょう。

詳細に就いては分かりませんので係りの方のお話を頂ければ幸いです。

芸術の森美術館の本郷新生誕100周年企画

＜概要＞

１９０５年生まれの本郷新、今年は生誕100年を迎えます。それに向けて現在準備中ですが概要は次の通りです。

日時:2005年5月21日～6月19日

場所：札幌彫刻美術館／札幌芸術の森

＊次号でより詳しくお伝えします。お楽しみに!!

展覧会案内

第３回野の花と遊ぼう

“私のすみれ”出版記念植物画展

北国の野生すみれを中心に４８種のすみれをまとめてみました。春いちばんのすみれを楽しみながらお遊びにいらしてください。

船迫吉江　（会員）

会期：０５年３月２２日～３月２９日

am１０：３０～pm７：００

（最終日はpm５：００）

会場：さいとうギャラリー中央区南１西３．ラガレリア５Ｆ

車谷津矢子　油絵展（会員）

平成１７年３月１日～３月６日

さいとうギャラリー

札幌彫刻美術館友の会ホームページ

http://sapporo-chokoku.jp

全国の彫刻ファンとの交流をめざし、XOOPSの「コミュニテイサイト」による全面的な更新を準備中

編集後記

冒頭の工藤さんの文章に出てくる隣のホテルは、当時設計に携わったので懐かしく拝読した。

全ての人達は、未来に続く螺旋階段を昇りたいと願っている。未来は、一歩を踏み出してこそ可能であり、時代は停滞を置き去りにする。

早川敏之

彫刻美術館友の会　会報「いずみ」No.１０
財団法人札幌彫刻美術館内 編集責任者濱久子
〒064-0954
札幌市中央区宮の森４条12丁目
電話とファクス：011-642-5709
平成17年1月1日発行
編集委員の連絡先：電話とファクス
斎藤美年子：011-643-7246
濱　久子：011-893-5212